

Title	『三国志演義』の「笑い」の位相について
Sub Title	The dynamics of laughter in the Sanguo zhi yanyi
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.37- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0037</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『三国志演義』の「笑い」の位相について

吉永 壮介

### 一、序言

戦国絵巻たる『三国志演義』（以下『演義』と略し、特に明記しない場合は毛宗崗本を指す）には、実在した人物に端を発する様々な感情が渦巻いている。歴史を骨格とするダイナミズムは、『演義』に巨視的な魅力を与えると同時に、微視的な描写への足枷となり、人物たちの感情は多くの場合、ごく簡潔な身体表現として類型的に表現される。『演義』のなかで、感情そのもの、もしくは感情を伴う動作を表現する文字で頻度の高いものは、「驚」六百二十八回、「喜」五百八十五回、「怒」五百七十回、「笑」四百八十三回、「哭」二百七十九回、「泣」百十六回である。この数値が語りうる内容は限られてはいるが、『演義』の感情表現の傾向の大枠は示し得ていであろう。百二十回の章回で平均すれば、一つの回ごとに五回驚き、五回喜び、五回怒り、四回笑い、二回声をあげて泣き、一回涙を流す、という計算になる。慌ただしいまでの感情の起伏は、一つには登場人物が多いこと、また一つには戦争と謀略の物語が展開することに主眼が置かれる

ため、婉曲で精緻な表現が少ないことに起因しよう。

突発事に驚き、良い方策を思いつきそれが図に当たり喜び、謀略や裏切りに怒る。『演義』で「驚」「喜」「怒」の文字に込められる感情は、どの登場人物にも均等に割り振られ、そのニュアンスも均質で単純明瞭である。しかし次いで頻度が高い「笑」という感情表現は、動作主及び笑うという行為に内包される含意に、ある種の偏向や屈折が見られる。以下、『演義』の世界のなかで笑いが占める位相について考察する。

## 二、毛宗崗本に現れる「笑」の回数と傾向について

『演義』第一回において、「怒」は六回、「喜」は九回、「驚」は五回現れるが、初めて「笑」うのは第二回の何進を待たねばならず、次いで笑うのは曹操である。試みに『演義』全体を通じて十回以上笑った人物を挙げると、諸葛亮七十五回、曹操六十五回、周瑜十九回、関羽十二回、司馬懿十二回、姜維十回(2)の六人である。次いで九回が龐統、八回が劉備、水鏡先生（司馬徽）、七回が呂布、孫権、司馬昭、五回が董卓、陸遜、鄧艾、四回が張飛、陳登、孫策、張松、孟達、左慈、曹丕、孟獲、三回が袁紹、徐庶、法正、曹叅、鄧芝、張温、馬謖、鍾会、羊祜である。膨大な登場人物のなかで、三回以上笑う機会がある人物は三十二名にとどまる。その一方で、諸葛亮と曹操の笑いが『演義』全体の笑いの約三割を占めていることは注目に値する。とりわけ赤壁の戦い前後の曹操（第四八〜五〇回）や南蛮征伐のくだりの諸葛亮（第八七〜九〇回）は笑い続けていると言つてよく、このことは物語を積極的に推進するポテンシャルがいかに曹操と諸葛亮に託されているかを示している。

曹操は正史でもしばしば快活に笑う。その姿は『演義』にも反映され、泣く劉備との対比は鮮明である。<sup>(3)</sup> 諸葛亮も正史で笑う姿が伝えられているが、周瑜は正史では笑っていない。周瑜が『演義』で笑う理由は、『演義』の笑いの分布を確認すると明確になる。毛宗崗本で最も「笑」が頻出するのは、第四五回「三江口曹操折兵 羣英會蔣幹中計」で、「笑」の字が十五回現れる。赤壁の戦い直前の謀略戦が昂じてゆく場面であり、前半は周瑜と諸葛亮の緊迫した騙しあい、後半は説客として訪れた蔣幹が周瑜に翻弄される様子が描かれている。「瑜笑曰、『此人命合休矣。』（周瑜は笑いながら「劉備の運命もここまでだ」と言った）」、「笑謂諸將曰、『説客至矣。』（笑いながら諸將に「説客がやって来たぞ」と言った）」、「瑜佯醉大笑曰（周瑜は酔ったふりをして、大笑いしながら言った）」等、謀略のさなかに発せられるのは、相手を出し抜いてやったという侮蔑に満ちた勝利の笑いであるか、あるいは自分の心理を韜晦して相手を騙すための笑いである。第四五回に次いで「笑」の頻度が高いのは、第四三回「諸葛亮舌戰羣儒 魯子敬力排衆議」の十二回である。諸葛亮は並み居る呉の文官たちと激しい舌戦を交わし、次々と笑い飛ばしながら論破してゆく。『演義』では概して謀略の心理戦や外交の場面で「笑」が多発する傾向があり、それは必然的に諸葛亮や周瑜のような軍師や参謀の笑いの増加を促すことになる。

そのことを踏まえて前述の笑いを発する人物を概観すると、いわゆる武闘派の人物が少ないことにあらためて気づく。『演義』には意気揚々と闘う武将達の姿が活写されているが、彼らが戦場で高らかに笑う姿は存外少ないと言える。物語中随一の猛将である呂布は七回笑うが、百五十歩離れたところに立てた戟を弓で見事に射て、劉備と袁術の部将・紀霊との戦いを調停したときに発した「呵呵大笑」を除けば（第一六回）、王允にもてなされた宴席での笑いや（第八回）、関羽と張飛に凄まれたときの「佯笑（作り笑い）」（第一三回）等であり、爽快な笑いとは言いがたい。豪快な印象の強

い張飛も四回しか笑っておらず、そのうちの三回は冷笑と侮蔑の笑いである。<sup>5)</sup>『三国志平話』（以下『平話』と略す）では庶民の喝采を受けて高らかに響いていた張飛の笑い声は、『演義』に登場する数多くの知識人たちによって排斥され、失われたのである。<sup>6)</sup>

孫策と太史慈が激闘の末に手を取りあって笑い（第一五回）、また関羽の義気に惚れ込んだ曹操が見せたような清々しい笑い（第二七回）の例もあるが、それらは物語全体からみればごくわずかにすぎない。『演義』の笑いは、闊達で開放的な感情の発露というよりは、他の誰かに向けた侮蔑もしくは優越感に根ざす「嗤い」であることが多い。そして思い込みや慢心による「嗤い」は、往々にして笑った人物自身に読者から跳ね返ってくる仕組みになっている。諸葛亮に知恵比べを挑む周瑜然り、赤壁の戦い前後の曹操然り、街亭の戦いの馬謖然り、諸葛亮意外の誰かが立て続けに笑いを発したならば、それは往々にして破滅への道しるべである。

かくもネガティブな嘲笑が渦巻く世界であればこそ、「人に笑われたくない」という圧力はある種の抑止力ともなる。劉備への忠誠を貫いて死のうとする関羽に対して、張遼が「豈不爲天下笑乎（天下の笑いものとなるのではありますまいか）」<sup>7)</sup>と思いとどまらせ（第二五回）、諸葛亮に殺意を抱く周瑜に対して、魯肅が「若殺孔明、却被曹操笑也（もし孔明を殺せば、曹操に笑われますぞ）」と諫めるなど（第四六回）、世間の常識から外れて「笑われる」ことの回避を名目に説得する例は枚挙にいとまがない。<sup>7)</sup>

笑いには愉悦や達成感から生じるものもあれば、常識からの逸脱で生じるシニカルな感情の発露の場合もある。生き馬の目を抜く権謀術数の世界である『演義』の笑いには、より強く後者の陰影が差し、そこには知性への称賛と揶揄の交錯する多義性が宿っている。<sup>8)</sup>その点が、比較的均質で明瞭なニュアンスでどの人物にも均等に機会が割り振られてい

る「喜」との相違であろう。

### 三、笑いを許された人々―司馬懿、陸遜、司馬昭

諸葛亮は別格として、軍師や参謀のなかで出色なのは司馬懿と陸遜である。『演義』における彼らの笑いの性質は他の人物とは大きく異なっている。本章では、物語のいかなる要請によって特徴的な笑いが導かれるのかについて考察する。

司馬懿については、諸葛亮に翻弄されるという点では、周瑜同様に道化的な役割を担わされている。しかしその一方で、諸葛亮の侵攻を防いだという歴史的事実が、諸葛亮に次ぐ異能者であることを司馬懿に要請した<sup>5)</sup>。司馬懿は馬謖が庸才であることを見抜いて笑い（第九五回）、蜀軍の城が空城であることを見抜いて笑い（第一〇一回）、公孫淵を手玉にとつて笑い（第一〇六回）、魏国の内なる敵である曹爽一派を欺くために痴呆のふりをして笑う（第一〇六回）。諸葛亮の空城の計にかかったとき（第九五回）を除けば、司馬懿の笑いは物語の展開から外れておらず、予見能力の高さが笑いに反映されていると言える。周瑜とは異なり、自分は諸葛亮には及ばないとしばしば素直に感嘆する姿ともあわせて、思い込みや慢心ではない精度の高い笑いが許された数少ない人物の一人である。その意味では、『演義』における司馬懿は真の道化役ではない。

陸遜については、呂蒙に対関羽の荊州攻略の計略を進言した際に一回（第七五回）、夷陵の戦いで三回（第八四回）、笑いのもとに予測が的中している。司馬懿同様に諸葛亮の能力に感服する一方で、陸遜には「予有一計（私に一計があ

ります」(第七五回)、「不出吾之所料(想定範囲内だ)」(第八四回)、「吾自有妙用(私に妙案がある)」(第九六回)という自信に満ちたセリフがしばしば見られる。こうしたセリフが多用されるうえに全て齟齬なく実現するのは、諸葛亮を除けば陸遜のみである。

劉備を打ち破りながら、陸遜が高評価で描かれているのは興味深い<sup>10</sup>。周瑜や呂蒙が史実を歪曲してまで悪し様に描かれたのと異なる最大の理由は、陸遜が撃破したのが劉備であり、諸葛亮や関羽ではなかったことに尽きるであろう。諸葛亮の侵攻を防いだ司馬懿への評価を陸遜が凌駕しているのは、むしろ諸葛亮を「防がなかったから」である。そのことは、陸遜の笑いの意図が外れた唯一の場面が、諸葛亮の石兵八陣を見くびったときであることも符合する(第八四回)。

蜀との同盟について「既與同謀、不得不從(すでに同盟を結んでいる以上は、約束を守らないわけにはゆきません)」(第九八回)と述べ、諸葛亮と干戈を交えなかったことよって、『演義』の陸遜への関心は希薄なものとなった。そのことは陸遜の死の場面が直接描写されていないことにも現れている。陸遜は夷陵の戦いの直前に「笑い」ながら「吾這條計、但瞞不過諸葛亮耳。天幸此人不在、使我成大功也。(私のこの計略は、諸葛亮だけは騙すことができない。だが幸運にも彼はここにいないので、私に大手柄を立てさせてくれるのだ)」(第八四回)と述べるが、このセリフは図らずも『演義』での陸遜の立ち位置を如実に物語っている。言うなれば、物語の中心ではなく周縁に位置していたことが、陸遜の笑いの精度を高めたと言えるだろう。闕沢や馬良は陸遜を「周瑜に劣らない」と評したが(第八三回)、それは笑いの精度という観点からも『演義』では実践的に描かれていることになる。

笑いの精度が高いという点では、もう一人、司馬昭を挙げなくてはならない。司馬昭は初登場時に、失脚していた父・

司馬懿の政界復帰を笑いながら予言したのを皮切りに（第九四回）、馬謖の敗北を予言して笑い（第九五回）、曹髦を冷笑し（第一一四回）、蜀討伐の軍議で三回笑い（第一一五回）、鍾会の謀反を予知して笑っている（第一一八回）。「吾豈不知之（私がどうしてそれを知らないはずがあるうか）」（第一一五回）という予見能力の高さを示すセリフは諸葛亮や陸遜とも重なる扱いであり、七回の笑いがいづれも事実、すなわち物語の展開から外れていないという点は、『演義』中随一の存在である。それは晋王朝への土台を確固たるものにして、三国志の長大な物語の幕引きを果たす人物のみに許された特権的な笑いである。『演義』の笑いはセリフとも連動しつつ、物語の構造に由来する人物形象の指標の一つとして表面化していると言えるだろう。

#### 四、毛宗崗本の描く「笑い」のディテール

本章では「笑」がリフレインの如く頻出する特徴的な場面について、毛宗崗本に影響を与えたと考えられる呉観明本<sup>11</sup>と比較しつつ考察する。章回と題目は毛宗崗本に拠る。

##### （一）第二二回「曹操煮酒論英雄 關公賺城斬車胄」

曹操が梅見の酒席を設け、劉備と天下の英雄について論じる場面である。呉観明本の下記引用箇所は、ほぼ嘉靖本を踏襲している。



【真観明本】①曹操正色言曰、「在家做得好事。」説得玄德面如土色。……玄德方纔放心。答曰、「無事消遣耳。」②操仰面大笑曰、「適來見枝頭梅子青青、忽感去年征張繡時、……」玄德曰、「淮南袁術、兵糧足備、可爲英雄。」③操笑曰、「塚中枯骨、吾早晚必擒之。」玄德曰、「河北袁紹、……可爲英雄。」④操笑曰、「袁紹色厲膽薄、奸謀無斷……非英雄也。」玄德曰、「……劉景升可爲英雄。」⑤操又笑曰、「劉表酒色之徒、非英雄也。」玄德曰、「……孫伯符乃英雄也。」⑥操又笑曰、「……非英雄也。」玄德又曰、「益州劉季玉、可爲英雄乎。」⑦操大笑曰、「……何足爲英雄。」玄德曰、「如張繡、張魯、韓遂等輩皆如何。」⑧操鼓掌大笑曰、「此皆碌々小人、何足掛齒。」

【毛宗崗本】①操笑曰、「在家做得好大事。」説得玄德面如土色。……玄德方纔放心。答曰、「無事消遣耳。」②操曰、「適見枝頭梅子青青、忽感去年征張繡時、……」玄德曰、「淮南袁術、兵糧足備、可爲英雄。」③操笑曰、「塚中枯骨、吾早晚必擒之。」玄德曰、「河北袁紹、……可爲英雄。」④操笑曰、「袁紹色厲膽薄、好謀無斷、……非英雄也。」玄德曰、「……劉景升可爲英雄。」⑤操曰、「劉表虛名無實、非英雄也。」玄德曰、「……孫伯符乃英雄也。」⑥操曰、「……非英雄也。」玄德曰、「益州劉季玉、可爲英雄乎。」⑦操曰、「……何足爲英雄。」玄德曰、「如張繡、張魯、韓遂等輩皆何如。」⑧操鼓掌大笑曰、「此等碌碌小人、何足掛齒。」

真観明本では①で曹操が「正色言曰（厳しい顔つきで言った）」ために劉備が顔色を失った、と辻褃をあわせているのだが、「好事／好大事」は劉備の家庭菜園をさしているものであり、曹操がいきなり「色を正して」話を切り出すというのはいかにも不自然である。毛宗崗本は曹操の笑いが不気味な謀略のニュアンスを漂わせ得ることを活かし、宴席の

場面にもそぐう「操笑曰」という簡潔な表現に収斂させている。②についても、呉観明本は曹操が唐突に「仰面大笑曰（仰向けになって大笑いしながら言った）」としているが、毛宗崗本は「操曰」と淡淡とした自然な切り出し方に変えている。続く英雄談義では、呉観明本が③④の全てを笑いながら言っている一方で、毛宗崗本は③④の笑いで愚弄するニュアンスを定着させた後、⑤⑥⑦は笑わずに話すことによって、考えるまでも無く論断してゆく勢いを演出し、最後の「鼓掌大笑曰（手を叩いて大笑いして言った）」へと導いている。曹操の自信に満ちた「嗤い」が躍如たるこの場面は、より自然な感情の起伏に基づいて抑揚のある場面展開を形成するという、細部の表現にもこだわる毛宗崗本の姿勢が滲む箇所である。

(二) 第三五回「玄德南漳逢隱淪 單福新野遇英主」

的盧に乗って檀溪を飛び危機を脱した劉備が、隠棲する水鏡先生こと司馬徽の屋敷を訪れ、伏龍・鳳雛とは誰かと尋ねる場面である。呉観明本の下記引用箇所は、ほぼ嘉靖本を踏襲している。

【呉観明本】玄德便問曰、「伏龍、鳳雛何人也。」①水鏡拍手大笑曰、「好、好。」……候天曉、玄德出房求見、問水鏡曰、「昨夜過是誰。」水鏡曰、「邇來投明主、已往他處。」玄德求問姓名。②水鏡曰、「好、好。」玄德再問、「伏龍、鳳雛是誰。」③水鏡只言、「好、好。」

【毛宗崗本】玄德曰、「伏龍、鳳雛何人也。」①水鏡撫掌大笑曰、「好、好。」……候至天曉、玄德求見水鏡、問曰、「昨夜

來者は誰。」水鏡曰、「此吾友也。」玄德求與相見。水鏡曰、「此人欲往投明主、已到他處去了。」玄德請問其姓名。②水鏡笑曰、「好、好。」玄德再問、「伏龍、鳳雛、果係何人。」③水鏡亦只笑曰、「好、好。」

呉観明本では「笑」は①のみだが、毛宗崗本では①②③全てに「笑」が付せられており、笑いと「よろしい、よろしい」という口癖をセットにして、水鏡先生のトレードマーク化を図っていることが分かる。前述の第二一回の梅園の場面では、毛宗崗本は「笑」の回数を減らすことによって展開をスムーズにしたが、第三五回では逆に「笑」を繰り返すことによる効果を狙っており、場面に応じて感情表現を活用していることが窺われる。人材に飢えた劉備からの質問に対して、水鏡先生は正史ではじらさずに答えているが、『演義』では『世説新語』の記述を踏襲して、「よろしい、よろしい」とはぐらかすばかりである。正史や『世説新語』では水鏡先生は笑っていないが、『演義』で見せる隠者の韜晦は「笑」の多義性のベールに包まれることこそふさわしかったのである。

(三) 第五七回「柴桑口臥龍弔喪 耒陽縣鳳雛理事」

周瑜を憤死させた諸葛亮が東呉に弔問に行った際に龐統が戯れかけた場面と、龐統が周瑜を軽んじる態度を見せたため、孫権の不興を買う場面である。呉観明本の下記引用箇所は、ほぼ嘉靖本を踏襲している。

【呉観明本】孔明辭魯肅等回。却欲下船、一人道袍竹冠、阜縑素履、一手揪住孔明、①大笑曰、「汝氣死周郎、却來吊孝、此是明欺東呉皆土木偶人耳。」掣所佩劍、要殺孔明。…背後魯肅趕到、急叫不可而止之。此乃襄陽人、姓龐、名統、字

士元。道號鳳雛先生也。肅曰、「孔明以禮至此、不可害之。」②龐統擲劍而喜笑曰、「吾亦戲之耳。」遂相歡樂。魯肅曰回。  
：權曰、「公之才學、比公瑾何如。」③統曰、「某之所學、與公瑾大不相同。」權平生絕喜周瑜、見統輕之、心中大怒。

【毛宗崗本】魯肅設宴款待孔明。宴罷、孔明辭回、方欲下船、只見江邊一人道袍竹冠、皂纒素履、一手揪住孔明①大笑曰、「汝氣死周郎、却又來弔孝、明欺東吳無人耶。」孔明急視其人、乃鳳雛先生龐統也。②孔明亦大笑。：權曰、「公之才學、比公瑾如何。」③統笑曰、「某之所學、與公瑾大不相同。」權平生最喜周瑜、見統輕之、心中愈不樂、：

この場面は呉観明本と毛宗崗本で大きく異なっている。呉観明本の②では「劍を放り投げて、『ふざけただけだ』と楽しそくに笑った」とする箇所を、毛宗崗本は「孔明もまた笑った」に改めている。呉観明本の「吾亦戲之耳」に類する表現は、毛宗崗本の他の箇所にはかなり残されていることに鑑みると、この場面では冗漫な説明は不要であるとして、諸葛亮と龐統という屈指の知識人同士の相互理解を「笑」の一字に集約したのであろう。③については、毛宗崗本は「笑」を加えることにより、龐統が木訥と述べているのではなく、意図的に周瑜を貶めて孫権を挑発しているニュアンスを明示している。

なお龐統が諸葛亮を戯れに脅かす場面については、既視感がある。第四八回「宴長江曹操賦詩 鎖戰船北軍用武」において、曹操の軍船を鎖で繋げるよう進言した龐統に対して、徐庶が「曹操は騙せても私は騙されないぞ」と戯れかかる場面である。呉観明本の下記引用箇所は、ほぼ嘉靖本を踏襲している。

【呉観明本】龐統急問曰、「汝何人也。」答曰、「吾乃徐庶也。」統聞是故人、心下稍定。回顧左右無人、乃曰、「汝果如此、可惜江南八十一州百姓、皆是你送了也。」庶曰、「此間八十三萬人馬、性命如何。」

【毛宗崗本】却說龐統聞言、吃了一驚、急回視其人、原來却是徐庶。統見是故人、心下方定。回顧左右無人、乃曰、「你若說破我計、可惜江南八十一州百姓、皆是你送了也。」庶笑曰、「此間八十三萬人馬、性命如何。」

龐統、徐庶、諸葛亮がいずれも襄陽の水鏡先生の門下生であることを背景として、二つの類似する場面が意図的に設定されていることは明らかである。毛宗崗本は徐庶のセリフの前に「笑」を加えて、それが深刻な語り口ではなく戯れであることを明示しており、前述の龐統の「大笑曰」とも呼応する形になっている。知識人たちの諧謔について、そのニュアンスが誤解無く読者に伝わるよう毛宗崗本が改変を加えていることが確認されよう。

## 五、龐統の諧謔に関する補説

『演義』の龐統は、しばしば戯画的な振る舞いを繰り返す。孫権、劉備への無礼な振る舞いに始まり、酒に溺れてのサボタージユ、そして監察にやって来た張飛の目の前で滞っていた訴訟の裁決を澁みなく終えると、筆を地面に放り投げる（第五七回）。そもそも酒を飲んだの龐統の怠慢を、大酒飲みの張飛が懲らしめに行くという設定自体が滑稽であるが、剣を擲ち、次いで筆をも擲つというその行儀の悪さは、諸葛亮と対をなすべく、品行方正とは程遠い地点での知性

の体現者の役割を担わされているためであろう。

『演義』は龐統の容貌について「濃眉掀鼻、黒面短髯、形容古怪（眉が濃く鼻が獅子鼻で、顔は黒くひげは薄く、奇怪な風貌である）」と描写する（第五七回）。『三国志』卷三七 蜀書・龐統伝は「少時樸鈍、未有識者（若い頃は地味で愚鈍なようであり、評価する者はいなかった）」と記すのみで、『演義』の「黒面短髯」という異形の根拠は不明である。<sup>15</sup>『演義』の龐統の容貌描写に関して気になるのは、蔣幹が龐統を見た際に「儀表非俗（容貌が並ではない）」（第四七回）と評していることである。孫権が劉備を評して「儀表非凡」と述べていること（第五四回）に鑑みれば、龐統に与えられた「儀表非俗」も褒め言葉であるに相違なく、「濃眉掀鼻、黒面短髯、形容古怪」との整合性に欠けると言わざるを得ない。それが単なるイメージミスであるのか、それぞれの場面が異なる筆者の手になったためであるのか、それとも『演義』以前に存在していた複数の「龐統物語」を取り込んだ痕跡であるのか判断としないが、『平話』では叛乱を扇動して死後に顕聖するという破天荒にして凄腕の異能者であったことを思えば、『演義』の龐統にそれまでに育まれていた「龐統物語」の残像を見ることが自然であるように思われる。<sup>17</sup>

なお醜怪な容貌ということで言えば、劉璋の別駕である張松が連想される。龐統も魯肅から「治中・別駕のような任務についてこそ能力を発揮できる人物だ」と評されたのも共通点と言えるであろうか。『演義』の龐統と張松は、いずれも類い希な知性に恵まれ、周囲の人物を愚弄して執拗なまでに戯れかかり、容貌醜怪であり、眉目秀麗で颯爽たる諸葛亮と楊修に対置される。彼らは知性による「笑い」と「嗤い」の桎梏を背負い、その容貌から存在そのものに諧謔味を付されて『演義』に登場する人物であると言えるだろう。

## 六、結語

『演義』に見える笑いの多くは、爽快な達成感によるものではなく、謀略、侮蔑、慢心、そして誤った判断によるものである。言うなれば『演義』には知性の残響としての「嗤い」が氾濫している。馮夢龍の手になると言われる『笑府』序には「人を笑うこともあれば、人に笑われることもあり、人を笑う者はまた人から笑われ、人から笑われる者もまた人を笑うのである」と見えるが、『演義』において「嗤い」の多くが我が身に舞い戻って来るのは、その具象化された姿である。

『演義』の「笑」は古典世界の類型化された表現の枠を出ないが、それは言い換えれば、潜在的な構造の要請のもと、場面と人物を選んで「笑」が表面化しているということでもある。諸葛亮と曹操が最も笑うことから分かるように、『演義』における「笑」は、物語を推進するポテンシャルを秘めたキャラクターを借りて噴出する。そして司馬懿、陸遜、司馬昭の例に明らかのように、ごく限られた人物にのみ「精度の高い笑い」が許されていることにも、「笑」が『演義』の潜在的な構造を織りなす縦糸の一つであることが示されている。

物語の終焉近く、蜀が滅び、魏に移送された劉禪は、暗愚ゆえの無垢な笑いに身を委ねた(第一一九回)。その一方で、敵国としての相克を越えて、羊祜と陸抗は知識人として望みうる最も気高い笑いを交わした(第二二〇回)。時の権力者たる何進によって幕を開けた「笑い」と「嗤い」の連鎖は、最も愚かな、そして最も知性的な二つの笑いに収斂されたのである。そうして最後に笑ったのがまた時の権力者たる司馬炎であるのは(第二二〇回)、作者の意図を超えて、

まさに物語の潜在的な構造が要請した帰結であると言うべきであろう。

『演義』で初めて笑うのは第二回の何進であるが、実は「笑」の字は第一回の最冒頭「滾滾長江東逝水、浪花陶盡英雄」に始まる詞に「古今多少事、都付笑談中」と現れている。三国のいずれもが勝者たりえなかつた長大な物語を編み、その冒頭に「古今の出来事は、みな談笑のうちには付そうではないか」と記した作者の意図は奈辺にあるのか。天下を取った司馬炎の笑いの彼方に思いを馳せるばかりである。

注

(1) 統計は台湾中央研究院の漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統2.0版 <http://hanji.sinica.edu.tw/> に拠る。(二〇一三年三月十二日閲覧)

(2) セリフの中の「以助一笑」「恐惹人笑」等はカウントしていない。また第一一六回の劉寔のように、一つの笑いが重複して現れる場合は一回のみカウントした。数え方によっては多少異なる結果が出ると思われる。

(3) 井波律子氏は「泣く劉備と笑う曹操。これこそ、モス・ロバート(英訳版『三国志演義』の訳者)も指摘するように、『演義』において具体的な身振りとしてあらわされる、両者のキャラクターの差異といえよう」と指摘する。(『三国志演義』第四章「物語構造の核——劉備・曹操・孫権」一三七頁、岩波新書、一九九四年) また金文京氏は、能力よりも仁徳を重んじるのが中国流のリーダー像であるとしたうえで、劉備がしばしば涙を流すことと二刀流であるのは、女神の代替物として求められているためである、と指摘する。(『三国志演義の世界』増補版)「五、人物像の変遷」、東方書店、一九九三年初版、二〇一〇年増補版)

(4) 毛宗崗本の引用は、中華書局『三国演義』排印本(一九九五年)に拠る。

(5) 張飛の冷笑と侮蔑の笑いは第五回一回、第三九回に二回見える。第二二回に曹操の部将である劉岱を生け捕った際は、



冷笑ではなく劉備との会話で笑っているが、戦場では一度も笑っていない。

- (6) 『平話』から『演義』への移行に伴う「儒教化」については、小川環樹氏の『中国小説史の研究』第一部第一章「『三国演義』の発展のあと」（岩波書店、一九六八年）をはじめ、数多くの指摘がなされている。井波律子氏は、『平話』は荀彧等の役割を張遼に代行させている点や、『平話』が描けなかった知識人を『演義』は「世説新語」から数多く組み込んでいる点を指摘する。（注（3）前掲書、第二章「民衆の哄笑と喝采——『三国志平話』の世界」、第六章「異彩を放つ傍役たち」）また、嘉靖本から呉観明本に至るまで見られる張飛の白話的なセリフが、毛宗崗本では大きく削除される点については、金文京氏の注（3）前掲書「二、『三国志』と『三国志演義』」、小松謙氏の『四大奇書』の研究」第二部第二章「『三国志物語の変容』（汲古書院、二〇一〇年）等に指摘が見える。小松氏は同書及び『三国志物語の変容』（懷徳堂記念会編『中国四大奇書の世界』西遊記『三国志演義』水滸伝『金瓶梅』を語る」、和泉書院、二〇〇三年）において、毛宗崗本は張飛の江湖的性格、言い換えれば水滸伝的な要素を削除したと指摘する。
- (7) 「天下恥笑」「恐惹人笑」「所笑」等の定型でしばしば用いられる。
- (8) 李福清氏は『三国演義与民間文学伝統』（上海古籍出版社、海外漢学叢書、一九九七年）第一部分「『三国演義』的源流」「『三国志平話』的思想基礎和人物描写」「人物情感的描述」において、『平話』の「喜」「怒」等について述べているが、「笑」への言及は無い。但し第二部分「『三国演義』和晚期評話」「表演技巧」「表現情感的手法」において、杭州の芸人や揚州の講師が多様な「笑」を演じ分けるテクニクを紹介している。
- (9) 井波律子、注3前掲書、第五章「主役たちの描かれ方」、参照。
- (10) 曹学偉氏は「夷陵之戰」的情節和人物創造」（『三国演義学刊』（二）、中国『三国演義』学会、四川省社会科学出版社、一九八六年）において、『演義』は夷陵の戦いの陸遜に対して赤壁の戦いの諸葛亮に匹敵する描写をしており、周瑜に対して揶揄や嘲弄が含まれていたのとは明らかにことなる、と指摘している。また劉備や呉の諸将から軽視されながら大功を挙げた陸遜の人物形象は見事である、と評価する。
- (11) 中川論「『三国志演義』版本の研究」（汲古書院、一九九八年）第二章「二十四卷系諸本の相互関係」第二節「李卓吾先生批評『三国志』」、第三節「毛宗崗本の成立過程」、参照。
- (12) 呉観明本の引用は、徳田武編『李卓吾先生批評『三国志』』影印本（ゆまに書房、対訳中国歴史小説選集、一九八四年）に拠る。

- (13) 『三国志』卷三五蜀書・諸葛亮伝引「襄陽記」、参照。
- (14) 『世説新語』言語第二注引「司馬徽別伝」に「時人有以人物問徽者、初不辨其高下、每輒言『佳』。」(楊勇校箋『世説新語校箋』修訂本第一冊)中華書局、二〇〇六年)と見える。
- (15) 明代小説における人物の容貌描写が相法の影響を大きく受けていることについては、小川陽一『日用類書による明清小説の研究』第三篇「明代小説と占卜」第一章「明代小説における相法」(研文出版、一九九五年)に詳しいが、龐統の容貌との関連については未詳。
- (16) 『演義』の成立過程については、上田望『三国志演義』の言葉と文体——中国古典小説への計量的アプローチ(『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第二五号、二〇〇五年三月)、小松謙『四大奇書』の研究』第二部『三国志演義』第三章『三国志演義』の成立と展開——嘉靖本と葉逢春本を手がかりに——(汲古書院、二〇一〇年)、井口千雪『三国志演義』の執筆プロセスに関わる考察(『日本中国学会報』第六四集、二〇一二年)等、様々なアプローチから研究が進められている。
- (17) 史実とかけ離れた龐統像が形成された要因については、拙論「龐統故事の受容について」(『藝文研究』第九九号、二〇一〇年十二月)、参照。異能者としての龐統については、土屋文子「龐統と諸葛亮——三国故事における軍師像の変遷——」(『中国文学研究』第二期、一九九五年十二月)に詳しい。井波律子氏は『平話』のやや唐突な龐統の反乱描写は、滅び去った「龐統物語」の痕跡を示しているとも考えられる」と指摘する。(注3前掲書、第二章「民衆の哄笑と喝采」六九頁)なお「黒い顔」について、金文京氏は、張飛の顔が芝居の臉譜や民間伝説では黒いのは、本来は凡俗を超えた神であり、そこから元雜劇に見られるようなトリックスターに転じた、と指摘する。(注3前掲書「五、人物像の変遷」)大塚秀高氏は、「瘟神の物語——宋江の字はなぜ公明なのか——」(『宋代の規範と習俗』宋代史研究会研究報告第五集、汲古書院、一九九五年)において、宋江と李逵の「黒い顔」は瘟神としての側面である、と指摘する。また上原究一氏は、「丈八蛇矛の曲がりばな——張飛像形成過程続考」(『三国志研究』第七号、三国志学会、二〇一二年九月)の末尾(九六頁)において、「演義」がそれまでの張飛像から「黒い」という要素の排除をはかった」と指摘し、「稿を改めて論じたい」としている。原文・或笑人、或笑於人、笑人者亦復笑於人、笑於人者亦復笑人。(天一出版社『笑府(上)』明清善本小説叢刊初編、第六輯、諧諷篇)なお『演義』とは直接関わらないが、「笑い」についての考察に、材木谷敦「笑話というジャンルはいかに語

られたか——馮夢龍『笑府』序を中心に——」（『紀要』第二一四号（言語・文学・文化 第九九号）、中央大学文学部、二〇〇七年三月）がある。また白話小説の感情表現についての論考に、田中智行『金瓶梅』の感情観」（『日本中国学会報』第五七集、二〇〇五年）がある。